

飼育下ガウルの過長蹄改善に向けた取り組みについて

○熊谷まい 先崎優
(横浜市立金沢動物園)

当園では1983年から11頭のガウルを飼育してきたが、現在は17歳の雌1頭が残るのみとなっている。これまで飼育してきた個体は加齢に伴って蹄の過長がみられ、現在飼育している個体も左前肢に蹄の過長がみられた。過去に麻酔下での削蹄を行った事例もあるが、いずれも予後不良で死亡している。当園で飼育してきたガウルは神経質な個体が多く、トレーニング等を用いた削蹄は困難である。

2017年7月から10月末まで個体の体調管理のために寝室と展示場の夜間開放を実施したところ、過長蹄の改善がみられた。その後、冬期の温度管理のため、寝室収容に戻したところ、再び蹄が過長した。これらの経過から、これまでの寝室の環境に問題があると考えられた。そこで、2018年4月から、飼育スペースの拡張と個体の運動量の増加を目的とした夜間開放を再開したところ、6月に再び過長した蹄が折れ、形状が改善された。これらのことから、一事例ではあるがガウルの過長蹄は寝室のような限られた空間や単調な行動パターンに原因があると考えられた。通常、大型動物の環境改善には、大規模な改修や予算が必要になることが多いが、寝室と展示場の開放といった簡易な変更でも、十分に効果を得られることが示唆された。